様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年６月５日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007 年度～2008 年度
課題番号：１９５３０６９８
研究課題名（和文）　日本的地域概念と主体的課題化学習との連動に関する理論的実証的研究

研究課題名（英文）A Theoretical and Verifing Research on the Connection with Japanese Community Concept and Self-motivated Learning Oriented for Life Problems.

研究代表者　片岡　弘勝（KATAOKA Hirokatsu）
奈良教育大学・教育学部・准教授
研究者番号　１０２２４４３７

研究成果の概要：本研究は、「地域」概念の日本的形態が日本社会における住民学習者の主体性形成をはかる上で有効性をもつという本研究の仮説を４つの実践事例に則して検証した。その日本的形態のモデルとして、次の４点を導き、農漁村ケースについては一定程度、妥当することを検証した。①「自然村的秩序」のもつ内発的エネルギーの存在、②「中央」勢力圏に対する自立志向、③生活圏の異心円的複合構造、④個人志向と集団志向との動態性を生み出す緊張力学の存在。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：社会教育、教育学、住民主体の学習、課題化学習、地域概念、上原専祿

１．研究開始当初の背景

本研究の焦点的なテーマである主体的な課題化学習は、社会教育における学習論研究の焦点となり続けてきた。その発想は、「学習者の生活経験との接合を重視した学習過程」と「科学の系統性を重視した学習過程」の両方を止揚し、統合する学習の成立条件を模索する中で自覚されてきた。しかし、既存の研究では、主体的な課題化学習の成立条件は未だ充分に解明されておらず、その主因は地域概念設定の曖昧性にあると考えられる。人間形成における地域概念の本格的な解明が緊急の課題となっている。

２．研究の目的

本研究は、既存の研究が捨象した地域概念の日本的形態と学習との連関構造に着目し、地域概念のモデル化を介して、主体的な課題化学習の成立条件の解明に挑戦するものである。具体的には、住民の主体的な課題化学習の成立条件と当該フィールド「地域」概念との連関構造を考察する。その際、一神教の精神風土を背景とする欧米社会の「コミュニティ」概念とは区別した上で、主体的な課題化学習を成立させる上で有効性をもつ「地

域」概念の日本的形態を明らかにする。
　本研究では、「地域」概念の日本的形態が日本社会における住民学習者の主体性形成をはかる上で有効性をもつという本研究の仮説を個別具体的な実践事例に則して検証し、その日本的形態の構造を分析する。この解明のため、下記の分析・研究を行う。
(1) 理論研究による「地域」概念のモデル設計
(2) 個別具体の実践事例による「地域」モデルの検証

３．研究の方法
以下の(1)～(6)により研究を行った。
(1)理論研究１：地域概念の日本的形態に関する理論分析
　「課題化的認識」方法を提起した上原専祿の主体性形成論・学習論及び「地域」概念の分析
(2)理論研究２：地域概念の日本的形態のモデル化
　１の上原研究の成果に基づきモデル設計を試みる。
(3)実践分析と仮説の検証１：内発的地域づくり実践の個別具体事例の調査研究（農漁村）
(4) 実践分析と仮説の検証２：内発的地域づくり実践の個別具体事例の調査研究（都市住宅地）
(5)地域概念の農漁村ケースと都市住宅地ケースとの比較検討により共通要素と個別要素の抽出
(6)総括：地域概念の日本的形態と主体的課題化学習との連関構造の総括的整理

　以上の研究によって、「地域」概念の日本的形態が日本社会における住民学習者の主体性形成をはかる上で有効性をもつという本研究の仮説を個別具体的な実践事例に則して検証を試みた。

４．研究成果
　以下、前記した(1)～(6)に即して、研究成果を記述する。

(1)理論研究１：地域概念の日本的形態に関する理論分析
　「課題化的認識」方法を提起した上原専祿の主体性形成論・学習論及び「地域」概念の分析

・上原専祿は、内発的なエネルギーを動因とする主体性の形成と、「中央」圏に対する自立性・自律性を備えた「地域」形成との連動力学を 1960 年代初頭に提起した。
・上原の「主体性形成」論は、古い「共同体」を相対化し、かつ、「近代」を相対化する過程で、それらを正当化してきた「権威化された知の体系」をも相対化し、個の解放を展望するものであった。
・「地域」はそのための価値観（尊厳）を導き出す源泉として構想された。

(2)理論研究２：地域概念の日本的形態のモデル化
　１の上原研究の成果に基づきモデル設計を試みた。
　このため、日本の社会科学・教育学に多大な影響を与えてきた大塚久雄の「共同体」概念（大塚『共同体の基礎理論』岩波書店、初出 1955 年、改版 1970 年）及び、R.M.マッキーヴァーの「コミュニティ」概念（R.M.マッキーヴァー『コミュニティ』(中久郎・松本通晴監訳、ミネルヴァ書房、原著 1917 年、日本語訳本 1975 年）と、上原「地域」概念との比較考察を行い、上原「地域」概念の特徴を浮き彫りにした。
大塚の「共同体」概念及びマッキーヴァーの「コミュニティ」概念はともに、欧米一神教の精神風土を背景として構想されたものではないかと思われる。
　これらと上原「地域」概念の比較考察により、上原が構想した「地域」概念の日本的形態の構成要素（要件）として次の４点を導き出した。
①「自然村的秩序」のもつ内発的エネルギーの存在と再生産
②「中央」勢力圏に対する経済・政治・文化の自立志向
③生活・生産圏の異心円的複合構造―曼荼羅的世界観―
④個人志向と集団志向との動態性（ダイナミクス）を生み出す緊張力学の存在

①は、内発的エネルギーが生まれ出る実際的な母胎に関わるものである。
②は、生活の自治権をめぐる「近代」との具体的な「たたかい」の中身、過程、及び結果に関わることである。
③は、当該「地域」の外延構造（他の「地域」、「国」、「人類社会」といった生活世界観の構造）に関わり、同時に、人間個人の存在リアリティに関わることである。
④は、個人志向と集団志向とが予定調和の関係にあるのではなく、両志向の対立・葛藤等の緊張関係こそがむしろ新たな次元における統合像の更新と両志向の伸長促進につながることを意味している。それは、①②③を包括する。
　以上４つの要素（要件）は、すべてある一つの価値志向性（＝哲学）とつながっている。それは、「近代」相対化という志向性である。

(3)実践分析と仮説の検証１：内発的地域づくり実践の個別具体事例の調査研究（農漁村）

次の２事例に関する調査研究の成果は次のとおりである。

①愛媛県宇和島市の遊子漁業協同組合の地域づくり

科学の成果を用いて海水の汚れを未然に防ぎ「2 年もの真珠」のみを生産して地域づくりを達成。こうした地域づくりの原動力となった学習・研究の内発的エネルギーに関わって、次の「地域」イメージが注目される。

・約 300 件の集落（自然村的秩序）
・「2 年もの真珠」のみを生産する誇り
・地域の経済的自立（地域づくり）の達成
・1960 年頃の沿岸漁業不振を契機に養殖漁業に転換＝厳しく苦い過去の経験との対話
・「網元制が強くならなかった条件」と「リーダー（古谷和夫氏）の存在」（古谷直康氏の言）
・個人の営漁意欲志向と社会の相互連帯志向

②長野県下伊那郡松川町の健康学習

1960 年代初め頃より住民主体の健康学習が蓄積されてきた。その地域づくりの原動力となった学習・研究の内発的エネルギーに関わって、次の「地域」イメージが注目される。

・話し合い学習と実態調査学習が、合併前の旧三か村および旧村内の各集落（自然村的秩序）を基盤にして展開され蓄積された。
・なかでも今回の調査では、最も生活条件の厳しい旧生田村（山村）に注目した。
・旧生田村では、急斜面の「坂畑」を耕す労働、かつては生活水・飲料水を川からくみ上げる生活等、大変厳しい生活。
・厳しい生活条件の中で、子どもの教育・学習を尊重し重視するエートスが存在。自らの意志を明言するコミュニケーション。
・「郷立総合飯田大学」の創造のため、無私の尽力を続けた宮澤芳重氏の存在。その理念に地域住民が共感して、宮澤氏の死後、「芳重地蔵」を建立（1972 年）。碑文には「向学心にもえたその生涯は終始苦学に貫かれた一生でありました。自らの生活をかえりみず郷里の発展を想い、飯田大学実現のために寄せられた情熱と、その実践は、私どもに深く尊いものを啓示してくれました。私どもはこの意志をつぎたいと思います。安らかに眠られんことを。」と刻まれている。

③小括

以上の考察から、前記 2 事例については、「(2)理論研究２」で既述した「地域」モデル①～④のすべてが一定程度、検証された。

(4) 実践分析と仮説の検証２：内発的地域づくり実践の個別具体事例の調査研究（都市住宅地）

次の２事例に関する調査研究の成果は次のとおりである。

①大阪府貝塚市の地域福祉ネットワーク

「ＮＰＯ法人安心して老いるための会」の地域福祉実践は、社会教育の視点を生かして下記のような活動を展開。こうした地域づくりの原動力となった内発的エネルギーに関わって、次の「地域」イメージが注目される。

・「経済的安定」「健康問題」「孤独不安」をめぐって様々な課題が生じている「老い」の厳しい諸現実を前にして、介護ネットワークづくりに取り組む。介護保険事業のみならず、介護保険を使わない、生き生きとした老後をみんなで創る交流・交歓施設「あいあい」の運営、老いの諸々の相談に応じる事業・老いの溜まり場として事業を展開。
・「老い」に関わる個別ニーズに対応してネットワーク（絆）を展開。
・人間の尊厳・誇りをみつめ直す活動（対話、文化活動）とケース検討会等での共同学習→理念の共有

②奈良県奈良市富雄地区の安全・安心のまちづくり実践

2004 年 11 月、小学校 1 年生の女児が誘拐、殺害された事件の後、自治会と保護者が中心となって集団登下校が始まり、現在でも継続。安全・安心のまちづくりが展開されている。こうした地域づくりの原動力となった学習・研究の内発的エネルギーに関わって、次の「地域」イメージが注目される。

・事件の再発を防ぐための、安全・安心のまちづくりへの志向性（犠牲者への想念と誓い）の共有
・安全・安心のまちづくりを志向する中で地域への誇りへの注目
・自治会、PTA、学校の連携と信頼関係
・自治会のネットワーク
・命の尊厳への視点から食育実践の開始

③小括

以上の考察から、前記２事例については、「(2)理論研究２」で既述した「地域」モデルのうち、③④が一定程度、検証された。

(5)地域概念の農漁村ケースと都市住宅地ケースとの比較検討により共通要素と個別要素の抽出

・共通要素＝「地域」モデルの③④
・都市住宅地ケースの個別要素＝モデル①のような旧来の自然村的秩序ではなく、地域福祉および児童安全見守りという個別の生活課題に即したネットワークがつく

られ機能し、新たな地域連帯（絆）が生まれており、内発的なエネルギーが生み出されている。
モデル②については、経済的自立性というよりも、当該地域の「誇り」や、人間連帯によって支えられる「誇り」の形成を志向している。

四つの事例に共通するもう一つの要素は、「死者との対話」あるいは「過去の苦い経験との対話」により学習の内発的エネルギーが生み出されている点である。

(6)総括：地域概念の日本的形態と主体的課題化学習との連関構造の総括的整理

「(2)理論研究２」で既述した「地域」モデルのうち、農漁村ケースでは①②③④が、都市住宅地ケースでは③④が、一定程度、妥当することが検証された。都市住宅地にとって①は、現代的な新たな絆の生成として位置づけられる。
以上の考察により、「地域」概念の日本的形態が日本社会における住民学習者の主体性形成をはかる上で有効性をもつという本研究の仮説は、四つの事例に則して、既述したような範囲内において一定程度、妥当することが検証された。その日本的形態の構造は、既述したような範囲と限界のもとで、指摘することができた。
以上の知見と視点は、主体的な課題化学習の展開構造を分析する際、内発的な学習のエネルギーが生み出され、継続される状況を分析する上で有効性をもつと考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

１　片岡弘勝「主体的学習の環境条件としての「地域」概念―実践分析のためのモデル設計―」（『奈良教育大学紀要』第 57 巻第１号、pp.33-46、 2008 年、査読無し）

〔学会発表〕（計２件）

１　片岡弘勝「上原専祿「主体性形成と学習」論研究（その５）―「地域」と「個」の存在構造―」（日本社会教育学会第 55 回研究大会・自由研究発表、2008 年 9 月 20 日、会場＝和歌山大学）

２　片岡弘勝「上原専祿「主体性形成と学習」論研究（その４）―「地域」概念のモデル化の試み―」（日本社会教育学会第 54 回研究大会・自由研究発表、2007 年 9 月 9 日、会場＝東京農工大学府中キャンパス）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕なし

６．研究組織
(1)研究代表者

片岡　弘勝（KATAOKA Hirokatsu）
奈良教育大学・教育学部・准教授
研究者番号　１０２２４４３７

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし